

2012年12月7日、武庫川女子大学大学院教育学専攻セミナー

「江戸」から教育を考える

A Pre-modern Perspective on Education

講演者：辻本雅史*

TSUJIMOTO, Masashi*

山崎洋子（司会 教員）本日、講師にお迎えしていますのは、台湾大学の辻本雅史先生です。3月まで京都大学に勤めておられまして、現在京都大学の名誉教授ですが、台湾では日本語を使いながら授業をされていると伺っております。私の教育史関連の授業ではなかなか日本教育史の話ができません。今日は近世を中心にお話いただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

【辻本雅史先生講演内容】

はじめに

こんにちは。武庫川女子大学には初めてまいりました。お招きいただき有難うございました。江戸時代を対象に、教育学を学んでおります。

いうまでもないことですが、現代の日々実践する教育のいとなみを研究するのが教育学です。江戸時代が始まるのは今から400年前の1600年ころ。江戸時代と現代の教育は違います。現代の教育を考えるのになぜ江戸時代を研究するのか、とよく質問されます。それに答えるのが、私の課題です。私のゼミ生でも江戸時代を研究している人は少ないのです。もし、江戸時代の教育を研究することが現代の教育を考える上に無駄ではない、と認めていただければ、今日の話は成功です。

『江戸』から教育を考える」とタイトルにしましたが、正確には『江戸時代』から教育を考える」という意味です。スライドで示したのは渡辺崋山の「一掃百態」という有名な絵の一部です。寺子屋の図で子どもたちは手習いをしています。これ、もしかしたら「学級崩壊」にみえませんか。実はそのようなつもりで書いたものではありません。

私は教育史が専門ですが、教育史とはなにかというと、歴史研究の方法で教育を考えること。つまり方法論は歴史学、対象は教育、ということです。「教育学」という学問があると思っている方がおられるでしょうが、私は「教育学」というピュアな学問があるとは考えない方が良いと思っています。「教育」という現実にとどのような学問でアプローチするか、つまり教育という対象に、哲学、社会学、心理学、経済学、行政学など、いろいろな学問的アプローチがあり、

それらの総体が「教育学」と考えた方がよい。これから先、教育人類学とか、教育〇〇学とか、といった新しい教育学ができてくるかもしれません。

私の場合は歴史学的手法で教育を考えているのです。

ところでみなさん、タイムマシン、知っていますね。あると良いけど、あるはずない、そう思っているでしょう。でも私にいわせると「タイムマシン」は、あります。たとえば、300年前の貝原益軒という儒者の書いた自筆の原稿が残っている。この周辺でも平清盛の関連の福原の遺跡も残っているでしょう。800年余り前の時代からその遺跡や史料が今に来ている、だからそれに乗れば、800年以上前に行くことができる。歴史研究者はそれができるのですから、みんな自分のタイムマシンを持っている、そう私は思っています。300年前に貝原益軒が書いた本をじっくり読んでいくと、益軒がなにを考えているかがだいたいわかる。だんだん益軒さんが友達のような感じになってくるのです。益軒の思想や気持ちが分かれば、彼の目で今をみることもできるはずです。300年前の益軒の目で今をみればどう見えるか。現代人が今をみるのとは違った目でみることができるはずです。今の学校ができてまだ140年、みんなが学校に行くようになってから100年くらいしか経っていませんが、今の学校は江戸時代の人からみればずいぶん変わって見えるはず。変わって見える違和感が、新しい発見なのです。その意味で、歴史研究はいま目にみえないものをみることができる。歴史研究はX線で見えるようなものなのです。

例えば一本の木を見るときにしましょう。それをどこからみるかによって違ってきます。近寄って葉っぱを一枚一枚めくって見る方法もある、対象に密着して詳しく調べるのですね。それはいわば心理学のような研究、子どもの心理は子どもに密着して研究しますね。それに対して、歴史研究はずっと遠くから見ます。300年前、400年前から見る。今あるものは過去の歴史の積み上げによってできているわけですから、今みえているものが見えない部分、それを見るのが歴史です。木に譬えれば根っここの部分、それが木を支えているわけですから、根っこをみることができるのです。

* 国立台湾大学 (National Taiwan University)

要するに歴史研究は面白い、ということをお願いわけです。見えないものをみることによって、現実をより深く、「根本」からみることができるのです。

さて、次の「教え込み型」と「しみ込み型」のトピックです。教育では、大人が子どもを教えると普通は考えますね。それが「教え込み型」です。今の学校教育は「教え込み型」です。すべてがわかっている先生が教えることで、子どもが学ぶことができる、という関係。もし、授業で教えていないことをテストにだすと、子どもに「それは習ってない」といわれ、先生は「ごめん」と謝るはずです。「教えることによって、はじめて子どもは学ぶことができる」という考え方ですね。

「しみ込み型」は「教えないけれど、身体にしみ込むように、子どもが自分で学ぶ」教育モデルです。「教え中心」と「学び中心」の2つのモデルと言い換えてよいかもしれません。

江戸時代の学問はほとんど「しみ込み型」でできている、というのが今日の結論です。日本には「教え」より「学び」の文化的な伝統があったことを、まずみなさんにお伝えしておきましょう。江戸時代の側からみていると、今の学校がいかに「教え」を中心にできているか、ということがわかります。

1. 手習塾（寺子屋）の学習

次に江戸時代の教育がどのように行われていたかを簡単に説明します。江戸時代で子どもが学ぶ場所は、とたずねると、たいいてい人は「寺子屋」と答えます。あと「藩校」とか「昌平黉」とかいう答えもありますが、教育史の教科書ではそれらが学校であるかのように書かれています。私はそれには違和感があります。近代の学校を前提にして、今の「学校」を過去に見つけようとしているのではないか。江戸時代の寺子屋は江戸時代の目でみるとどうみえるかをまず考えなければならないのです。

「寺子屋」という言葉を私は使わない、「手習塾」を使います。「寺子屋」は広辞苑にもものっていますが、寺子屋は上方（京都や大阪）で使われていた言葉ですが、江戸ではほとんど通じませんでした。むしろ、手習いを教えていた塾だと思うほうが良いのです。

寺子屋は文字を学ぶ場、私塾は学問を学ぶ場、どちらも個人経営ですから、寺子屋も塾と考えるべきです。寺子屋・私塾という分類は明治政府が明治10年代に調査のために、ヨーロッパをモデルとしてつくった言葉です。それを私達がつかう必要はない。学問的には、「手習塾」と「学問塾」というのが正しいと私は思っております。教育史関係者のなかではだいたいそれで定着しつつあるようです。

その手習い塾ではなにを習っていますか、文字ですね。でも今の小学生がやっている文字学習とは違う。習字をしているのであって、手本を手本のとおりに写している、そ

れが手習いです。

江戸時代の子どもの手習い率や識字率を出すのはむずかしい。地方差が大きいのです。田舎では低く、都市では高い。京都や大阪、近江の一部などでは、おそらく男の子は90パーセントをこえている可能性があります。でも新潟のある地方都市では20から30パーセントくらいという研究があるようです。

しかし、江戸時代は文字を使うことを前提に社会のしくみができていました。私はそれを「文字社会」と呼んでいますが、これが江戸時代の前と後で決定的に違うところです。政治に多少ともかかわる人は文字が読め、複雑な計算ができないとやっていけない。商売をする人も同じです。職業や地位によって文字や計算の能力が必要となってくる。社会全体が文字を使うことが前提となっていた。だからできるだけ文字を学んでおいたほうがよい、という考え方が広まっていたのです。それは世界史的には、この時代としてはきわめて特異な歴史現象だと思います。

ヨーロッパにおいても識字率は地域によって違う。どこが高いのでしょうか？イギリスやフランスが高いと思うかもしれませんが、宗教が関係しています。聖書をよめるかどうかに関係するのですが、北欧が一番高いのです。

今、世界中でおきている革命を私は「メディア革命」と呼んでいます。ここ20年の変化は劇的で、メディアが変わると世の中は変わります。今のメディア革命までは、メディアの中心は文字と出版でした。その文字と出版がメディアの中心となったのは、私の考えでは17世紀です。17世紀、江戸時代に「メディア革命」があったと考えています。出版メディアが成立することは、情報が商品になることを意味します。それまではおもに声で情報の伝達が行われていました。中世では、手紙を書いたり政治文書に関わったのは、一部の特権階層だけでした。

文字が一挙に普及したのは江戸時代で、多くの民衆が手習塾で文字を学び始めたのです。独特の文字文化をつくりだしました。それは今のみなさんよりはるかにレベルが高い。例えば、手紙の書き方。江戸時代は季節の挨拶は24節季ごとに変わります。2週間ごとに挨拶を変えないといけない。書く人が男か女かでも違う。用件によって書き方は複雑、それらの書式をマスターする場が手習塾です。文字を複雑に使い分ける力をもつことは、文化的にレベルが高いことでしょう。

寺子屋を小学校と同じと考えてはいけません。あまりに違いすぎます。17世紀に手習塾が出現したことは画期的です。大人が子どもに文字を教える空間が一挙にひろがり、文字を教える職業的な教師が登場しました。いずれも歴史上、初めてのことです。教育の大きな歴史転換期とも言えます。手習塾・寺子屋を小学校のイメージで、読み、書き、算数を教える学校、と見てはいけません。手習塾では、文字を書くにも上手に書くことを目指します。その文字も草

書連綿体、続け字で一筆書きのように書くのです。

時、所、相手によって文章の書き方や文字に関する約束事が違います。文書のフォーマットを覚えることが一番大事でした。ある手習塾では「三行半」の稽古をしていた可能性があります（確認は難しい）。子どもが「三行半」離縁状をなぜ習う必要があるのか、それは近代人には理解できませんが、一生の間に書く可能性のある文書は手習塾で習っていたのです。当時、離婚は結構多かったんですよ。

上手になるまで同じ手本を繰り返し書く。手本を真似して身体で覚える。身体で覚えこませるのが「滲み込み型」。現代の学校とは違って、江戸時代には一斉授業はどこにもありません。先生が前の日に手本を書いて用意しておいて、朝に一人一人に手渡す。その手本を子どもがまねて書いていく。渡辺崋山の絵が示すように、決まった席はない。机の並びもばらばらでよいのです。個別学習ですね。そして手で覚えるのだから、身体での学習です。

江戸時代の寺子屋は一斉登校ではない。一斉登校されると先生は困る。たとえば、豆腐屋の朝ははやいから、豆腐屋の子はやく登校してくる。酒屋の子どもは遅い。個別学習ですから、それで問題はなかったのです。いわば子どもの生活のなかに「学び」が組み込まれていました。今は一斉授業だから、みんな同じ時間に来てくれないと困る。つまり学校の教える都合に子どもが合わせているのです。

女の先生は家事をしながら、手習いをみる。また手習いの他に、裁縫を教えることもありました。清書して合格したら、次の手本を与えられることもあるし、場合によってはもう家に帰る選択もありました。

「町触」、これは今で言う町民向けの法律ですが、膨大な町触を集めて巻物にしたこのスライドをみて下さい。触れ（法）は改正や廃止されなにかぎり生きています。だから、ずっととっておき、必要なときにいつでも見られるようにしておかないといけな。毎年新しく継ぎ足していつてこのようになったのです。市民が「文字社会」に生きていたことをよく示していますね。

2. 学問（儒学）の学習

次に学問の学習について。江戸時代の学問は儒学です。武士は藩校で学んだと言われますが、藩校は江戸時代の後半、特に最後の100年に急速に増えます。前半の時代には、武士は学問はいらないと考えられていました。その他、個人がやっている学問塾でも儒学は学ばれていました。

儒学とはなにか？と問われたら、一番シンプルな答えは「経書を読む学問」です。経書とはなにか。「経」とは一番根本という意味で、仏教では「お経」という。中国では四書五経、孔子がまとめたテキスト、あるいは孔子の弟子たちが孔子の教えをまとめた本ですね。古代中国語で書かれている古典漢籍を読み、解釈する学問が儒学です。儒学を学ぶ子どもは一部の階層だけでしたが、武士だけでなく比

較的裕福な庶民も学んでいました。学問はものを知的に考えるための資源、材料です。江戸時代はそれが儒学でしたが、それより前の時代は仏教でした。

数え年8歳前後（今の小学校1～2年生）から、素読を始める。中国の古典を、返り点と送り仮名はついていますが、いきなり読まされる。先生と子どもが一对一で向かい合う。したがって、能率は悪い。今の学校教育のように先生ひとりが、大勢の子どもに一斉に教えるのではありません。

読む本の順番は決まっています、『孝経』が初めです。文字を指し示しながら、先生が声に出して読む。それを子どもはおうむ返しにかえす。せいぜい一人あたり15分程度でしょう。家に帰って復習して覚える。次の日に「昨日習ったところ」を正しく覚えているか確認のテストをされて、合格すれば次に進む。覚えていなければやりなおし。

益軒は100字を1日100回繰り返せ、と言っています。四書は全部で52800字だから1年半でできる。10歳すぎたころには、四書は全部覚えている。冒頭の一節をいえば、その後の文が流れるようにでてくる。これを私は「テキストの身体化」と呼んでいます。例えば『論語』の本一冊が、身体の中に埋め込まれているのと同じだからです。四書の素読を終わればどんな漢文でも読めるようになる、と益軒はいいます。今、小学校で教科書を全部暗記しろという保護者からブーイングがくるでしょうが、江戸時代で素読を否定する人に、私は出会ったことがありません。

漢文は中国古典語ですが、返り点と送り仮名を付けて日本語にして読む。漢文の読み下しは江戸時代の日常の言葉とは違う、独特の雅語、非日常の古典雅語でした。結論を先に言うと、漢文というのは、暗唱（体で覚える、身体化する、滲み込み）するのに適したリズムや言い回しの言葉であったと私は思っています。例えば詩吟は漢詩を声で朗々と詠い上げるでしょう、漢詩はそれに適しているのです。中国の学生は今も漢詩をよく覚えています。それは歌にして覚えたそうです。日本の訓読は声に出すのに適したリズムになっている、私はそう仮説をたてています。つまり経書の素読は、それを暗唱するための学習だったと言えますね。

素読を終えたら四書五経は身体で憶えています。さらに詳しく学問をするには「講義」に進みます。それは今でいうレクチャーの意味の講義とは違います。「義」とは意味、すなわちテキストの意味を声に出して説明していくことです。素読は意味を教えない、音だけで覚えるのですが、講義は注釈をもとにして内容が教えられるのです。代表的には朱子の注釈を使うわけですが、これも一对一で教えるのが普通でした。

会講は、素読を終えた同じレベルの人が10人前後で集り、一緒に同じ経書を読んで解釈するのです。予習してきて、当番が発表しみんな議論をする。今のゼミに近いで

すね。輪講とは、論語なら論語という経書を順に講釈（解釈）して議論する。予習でしっかりと注釈書を読んでおくのです。

注釈書を目でよむのが「独看」。それを私は黙読とは思っておりません。それは、目で画像として認識するいわば「スキャナーの読み」のようなものではないか、そう思っています。たとえば2時間で漢文を200頁、2万字を読んでいるのです。日本語でなく漢文をそのスピードでよむのは、画像を読み込むように、目でスキャナーしているようなものでしょう。声に出さなくても、素読で基礎は身体にはいつているのですから、目でみた瞬間に意味がとれるようになっている。そこまでのレベルにいつているのです。

3. 学びの身体性

素読によって漢文が自由に読めるようになるということはどういうことでしょうか。どんな本でも素読したわけではありません。経書という、孔子やそれ以前の聖人の言葉や行いが書かれた本を素読したのです。経書は聖人の思想や言葉の記録ですから、真理のつまった宝の本。それを素読、暗唱して身体の中に取り込んでいく。知的な文章は漢文で書くのが江戸時代の約束事です。それはなぜか、漢文、聖人の言葉でなければ表現できないからです。漢の時代から経書の注釈書は膨大にある、なかでも南宋時代の朱子学は特に日本に大きく影響しましたが、古来多くの人が議論してきた漢文を、素読によって自分の身体にいつているのです。江戸時代の知識人たちは「漢文で考えた」のです。

素読によって、漢文の言葉が自分のものになり、その聖人の言葉で考え、知的活動を行う。考えるのは言葉で考えるでしょう。だから思考は言語活動なのですね。言語を持たなければ考える力も弱くなる。

「学びの身体性」についてですが、素読は「身体」の学びです。益軒は「そらに覚えざる事は、用にたたず」暗記されないものは役にたたない、といっています。

ヨーロッパの哲学者、たとえばデカルトやライプニッツやヘルバルトらはラテン語で学位論文を書いています。つまり彼らは、ラテン語でものを考えていたわけです。

学校での学習は「覚えればよい」と思っているでしょうが、「覚える」だけではなく、体のうちにしみこませないといけない。益軒は「初学の知るところ、俗学の記すところは皮膚にとどまるのみ。君子の知るところは皮よりして肉に至り、肉よりして骨に至り、骨よりして髓に到る。」と書いています。体の内側にしみ込むイメージがこのように語られているのです。学んで、自分の体にしみ込んでいかないものは、言葉先だけの知識にすぎない、というのです。

江戸時代の「学ぶ」とは、そういう深い意味がある。それに対して、近代学校で教えている「知」はなにか。結論

からいうと、「身体性」がかなり削られていますね。サイエンスがモデルとなっているのですね。文学部の研究でも『源氏物語』の感想文を書いても研究にはなりません。客観的なデータを集め、仮説をたてて、データにもとづいて論理的に仮説を証明といく作業が必要です。歴史学も史料を集めそれを使いながら、論理的に説明しなければ、学問とはいえないのです。

実は、それは学術論文だけでなく、学校にも、学問が背景にある。一義的に文字に記された概念と論理で構築された知です。近代学校は教科制になっています。学問に基づき、子どもの発達段階にあわせてカリキュラムがつくられます。小学校の教科書でも、その著者は大学の先生です。大学で研究される学問が知の正当性を保障しているわけです。教える専門の先生が教えることよって、はじめて子どもは学ぶことができるのです。これがすなわち「教え込み型」。近代の学問は「しみ込む」要素が弱いのです。

4. 江戸時代の教育の考え方

益軒の『和俗童子訓』は、生まれて1歳から20歳になるまでの、年齢に応じた教え方が書かれています。益軒は、オリジナリティのある独創的なことはあまり言っていないので、思想史ではあまり評価されておりません。しかし社会的にはとても大きな影響を与えていますから、思想史とは異なった観点から見直される価値のある人です。

さてこの「和俗童子訓」のキーワードをひとつだけあげるとすれば、「予（あらかじめ）する」を私はあげます。「予する」というのは、生まれたばかりの子どもはまだ悪に染まっていない、いわば白紙。しかし、一度悪に染まってしまうと、どんなに教えても善に移らない。だから、はじめて母乳以外のものを食べはじめてものを言うようになったときから教えないといけない、ということです。これは一種の早期教育のようですが、今でいう英才教育ではありません。生まれつきの素質がよくなくても、ちゃんと教えればよくなる。素質が立派でも教え方が悪かったら悪くなる、といえます。それを、ウグイスの例で説明しています。上手によく鳴くウグイスのそばにいるウグイスのひなは、鳴き方が上手になる。ウグイスでさえそうなのだから、人間は生まれた後の環境、つまり周りにどういう人がいるのか、それが大事だということです。

ところで、ものを考えるのは心の働きですね。ではその心はいつ生まれてくるのでしょうか。言葉が出はじめる満1歳過ぎの頃は、人間の成長には大きな変化のとき。人は言葉で考えるのですから、言葉が生まれるとともに人の心が形づくられてくる、これが私が益軒から学んだ仮説です。私は、「言葉は心に形を与えるもの」と考えています。心は目に見えないけれど、言葉を獲得することによって心が表現できます。いいかえれば、言葉という「容れ物」ができはじめて心がそのなかにおさまる、ということです。豊

かな言葉をもてば、心が豊かになるはずです。そういえば、日本には昔から言葉遊びや童謡などの豊かな伝統がある。しりとり、なぞなぞ、かるた、ずいずいずっころばし、手まり唄など。遊びながら、歌いながら、身体で言葉とその感覚を身につけたのです。

言葉が自分のものになれば、言葉で自己表現ができ、他人の言葉を通して他者の言葉、他者の心がわかり、他者と共感できる。言葉を通して人と人がつながり、他者理解へとつながっていく。言葉こそ人間の文化の基本になるものではないかと思うのです。とすれば、どういう言葉で考えるか、というのが重要な問題ですね。

私の教え子で、アメリカへ留学してアメリカの大学教員になった人が、日本に帰ってくると、「英語で考えると私はついアグレッシブになる」といいます。英語で考えると、表現が変わり、英語の心と文化になっていく。それは、言葉は心の在り方と深い関係があることを示す一つの例ではないかと考えられます。

文部科学省は「心の教育」の大切さを言いますが、そのための方法論をもっているとは思えない。私は「心の教育」の方法論としては、言葉の教育を中心にするべきではないかと考えています。今、江戸時代のような素読をやれとはいいませんが、日本の豊かな古典や名文をしっかりと身につけるのです。真似をしてもいいから、自分でそれらが自在に使えるほどに身につけることが大事です。益軒に即していえば、子どもは生まれたときは白紙の状態。イギリスのジョン・ロックもほとんど同じことを言っていますが、だからといって、(昭和のはじめに春山作樹が指摘しているように)、益軒を近代思想だと考えることはできません。

子どもはその意味がわからなくとも周りの人をまねる。身体でまねる。子ども時代にまねて無意識に習得したことは生まれつきと同じになる。あとでどんなに教えてももう変わらない。だから子どもを育てるのに一番大事なのは子どもを取り巻く人の環境です。多くはお母さんでしょうが、お母さんに限らず子どもの世話をしている人。家族であったり、保育士であったりします。

益軒は「礼」を大切に考えます。礼とは身体で表現する人間の正しい行動様式ですね。それは大自然の変わることをない法則をモデルにして、聖人がつくった文化的な行為の様式だと信じられています。確かに自然は規則正しく変化していきますが、それが人の行いの手本だということです。「礼」は人を一定の型にはめる、いわば身体を規律化することで、人を型にはめる教育であると見ることもできます。でも益軒はあらゆる人間の行動には正しい様式、つまり礼があり、それに従って生きていけば自然に道徳的になり、結果的に心が安定して成長していく、つまり人間形成へとつながる、と考えています。「礼による教育」という考え方がいいでしょう。

たとえば茶道を思い出して下さい。茶道にはたくさんの

約束事がありますね。それを自分の身体で表現しなければならない。では、先生の通りに身体で表現できればパーフェクトであるかということ、おそらくそうではない。一番大事なのは形ではなく、お茶の心だというはず。つまり茶道の稽古の型は、茶の深い心に達するための通路と考えられているのです。徹底的に型にはめ、もっとも美しい型を子どもに身につけさせ、それが自然にできるようになっていけば、つまり習慣になれば、心も豊かになり、道徳的に生きていけるというわけです。私はこれを、「身体から心へ向かう」教育観と名づけています。これが日本の伝統的な人間形成、つまり教育の方法でした。

それではこうした考え方のもとは、教師の存在はどのように意味づけられるのでしょうか。教師は子どもが学ぶ上での最大の環境です。この環境こそ重要。そこでは師弟間の信頼感が絶対大事で、信頼感がなければ弟子の方で模倣する力は生まれません。子どもは真似をする力を本能として持っている。真似をするそのモデルがよくなかったらまずいのです。益軒は「教え」ということを、「おしえは、おさえ也」と定義しています。その定義によれば、「教える」ことは「抑える」ことである。子どもに自由に活動させておいて、一定のルールをこえたときに子どもを「抑える」。そうすることによって、子どもは何が悪いのか、何がよいのか、結果として知ることができます。悪いことを「おさえる」ことが「教え」の意味であるということです。

では「学ぶ」はどうでしょうか。「ま」と「なぶ」にわけて、「真(まこと)を習うが学ぶなり」、と益軒はいいます。手本と同じように書くことが学ぶ、というのが益軒の説明。<真似する一真似される>の関係であって、<教える一教えられる>の関係ではない。信頼関係のある先生なら、黒板にかく文字まで真似しますよね。

子どもが自分で学ぶことが基本だとすると、学ぶ側の「立志」が何より大事な前提となります。「立志」というのは、今の言葉で言えば「やる気」です。なぜ学ぶのか、学ぶ側の内発的動機がやる気のもとで、それが一番大事。子どもに「なぜ学ぶのか」を、自信をもって説明でき納得させられるようでない、今の子どもに学ぶ意欲を持たせられないですね。

私は三次方程式を学ぶ意味はわからなかった、今もわかりません。「なぜ学ぶのか」がわかりにくい今の時代において、子どもに納得させる言葉が必要です。ただ言葉だけでもいけない。納得いく理由、それを考えるのは、教育学研究者の仕事でしょう。「学力低下」は実際には学習意欲の低下が根本の理由ではないでしょう。

ところで、教科書観の問題ですが、日本の先生は「教科書で教える」よりも「教科書を教える」と批判されることがあります。教科書は教えるための教材(道具)であって、教科書という教材を使って、先生が教えるというのが今の学校の基本原理ですね。ところが日本の先生は「教科書を

教えている」と批判されることがあります。そのくらい、教科書は大事な本、と意識されているようです。

なぜそうなるのでしょうか、江戸時代の側から考えると容易に説明がつかます。「教科書で教える」なら、教科書は教える教材・道具にすぎない。「教科書を教える」なら、子どもの側からは「教科書を学ぶ」ことになり、先生はそのための手段となります。学ぶ側からみると教科書を学ぶことさえできれば、先生はいなくてもよいこととなります。でも、江戸時代では「教科書を教えて」いました。つまり経書を教えていたのです。先生も経書を学んでいたわけですから、先生が学んでいる姿を子どもは学んでいたのです。江戸時代からの教育に関わる文化が、今の学校教育にも見えない形で結構生きています。ヨーロッパと比較すれば、明らかにそういえます。滲み込み型を基本において、先生は学ぶ姿をその先輩として見せていた。それは寺子屋のみならず、丁稚奉公や職人の教育も構成原理は同じです。ことばではなく身体で教えるのです。落語でも師匠は教えない。「芸は盗め」といわれますね。自己学習の文化は寺子屋だけでなく、広く社会全体にいきわたっていた前近代の教育文化であったといえるでしょう。

5. 自己学習の文化伝統

明治時代に近代的な学校教育がひろまり、教育が大きく変わったようにみえます。もちろん大きく変わりましたが、実は前近代の文化が継続して生きているところもあります。例えば通信教育があります。当時（明治中期）、東京に行くことは難しかったため、大学の発行する「講義録」を通信教育で教えるということが行われていました。そのうち成績の良い人は特待生として東京に呼ばれて学ぶこともありました。

大正時代の中学校も同様です。その入学定員は1万人くらい。でも「中学講義録」（通信教育）で学んだ人のほうがその何倍も多かったのです。それを通して国家試験に合格すれば、中学卒業と同等の資格が与えられていました。日本は通信教育が今も多種多様にありますね。通信教育がこんなにさかんな国は、おそらく他にはないでしょう。通信教育とはプリント等による自己学習のシステムですから、今も日本にはこの自己学習の文化伝統が底流で生きていますと考えられます。

多くの子どもたちが通っている今の公文式学習についても、似たことがいえるでしょう。プリントを使った自己学習のシステムですからね。今の公文が江戸時代と違うのは、学校教育を前提としていること。公文は学校のシステムを裏返した方法です。江戸時代の手習塾のシステムを今実現しようとするれば、公文式になるように思われます。

次いで「宿題」という習慣についても一言。私の子ども時代は毎日宿題がありました。今30歳代半ばの私の長女が小学一年生のとき宿題が出ました。私はそれが不満で、そ

の担任の先生に質問しました。その先生はどう答えたと思いますか。宿題をだすのは「授業で足りないからでなく、短い時間でも自分で学ぶことが当たり前という習慣をつけてほしいからです」と説明されました。思えば、学習机やランドセル、勉強部屋、こうした環境を整えることが親の責任と意識するのは、家に帰って勉強するという習慣を期待しているからですね。私はアジアの多くの国の学校を見ましたが、ランドセルで子どもが教科書を持ち帰る国は多くはありません。ランドセルは、家で勉強しなければならないから、必要なのです。やはり宿題によって自己学習を習慣化しているといえます。なぜ、自己学習を習慣化しなければならないのか。結局、大学受験等と関わってくるようです。

考えてみれば、受験参考書も自己学習のためにつくられているでしょう。大学入試は高校の教科書の範囲を超えて出題してはいけません。受験生は高校3年間同じ教材で学習して、その学力を競うのが大学受験です。同じ内容を同じ時間で学ぶ中とする競争試験。大学入試は、一体何を測定しているのでしょうか。それは学校の授業以外にどれだけ効率よく自己学習できたか、いわば自己学習力を測定している、ということになるのではないのでしょうか。大学の側からみると、自己学習力のある学生が望ましい学生なのです。

学力だけではだめといいつつ、どの大学も偏差値の高い学生、受験学力の高い生徒を求めているでしょう。いわば自己学習力の高い学生をほしがっているのです。大学では手とり足とりは教えない。自分で問題を見つけて自分で学習するのが一番望ましいのです。ただ自分でどのように問題をみつけるか、それが一番大事です。今の受験の学力はそこがぬけているという問題が確かにあります。でも、結果論として、自己学習力がある学生を大学は求めている、限られた時間で限られた内容をどれだけ効率よく自己学習できたか、という能力を測っている、そう考えたほうがわかりやすいのではないのでしょうか。

例えば、私は「数学は暗記」と教えられました。数学はパターン化された類題を繰り返して憶えこみます。もし問題をみた瞬間にパターンが読めたら、正しい答えがでできます。それが「滲み込み型」の学習です。受験勉強は滲み込みの勉強で自己学習力を鍛えている、そう考えた方が説明しやすいのです。受験の弊害がいわれ続けてきましたが、いまだに本質的には改革されていないでしょう。センター試験が導入されても高校の学習のあり方までは大きくかわっていないのです。

最後に。私は今の学校教育は「飽和状態」になっていると考えています。飽和状態とは、もうこれ以上は発展しないところまでできているということ。これまで学校教育を中心にやってきました。140年前にはじまった近代の学校システムは、今も本質的には変わっていないのです。学校が、

今の社会の中でもつ意味と、100年前の学校が持っていた意味とは同じではない。社会が大きく変容し、子どもの文化的世界もまったく別の世界に変わっているのに、教育のやり方はそう変わっていない、という問題です。先生が教科書を片手にもって依然として「教え込み型」で教えている。近代化が進んでいた時代は、このやり方はとてもよく機能して成功したシステムでした。でも今は高度情報化社会となり、しかも少子高齢化社会を迎えています。極論かも知れませんが、今の学校のシステムは今の時代にはもう合わなくなっているのかも知れません。

もちろん、学校教育は必要です。しかし学校教育だけで教育の問題を考える時代は終わったと思います。少子高齢化社会では、学校教育中心ではなく、生涯学習を中心において学びをとらえる視点が必要であり、その立場から学校教育も再定義しなければいけないのではないのでしょうか。生涯学習のための基礎的な学び方を学校で学ぶといった教育のあり方を考えなければならないと思います。世の中は常に変わり続けるのだから、子ども時代に学んだことが大人になってもそのまま通用するとは限りません。子ども時代に学ばなければならないことは確かにありますが、生涯学習の立場から、学校の役割を改めて考えなければならないと思います。

30歳過ぎて学ぶにも、メディアが多様に広がっているのですから、さまざまな学び方があるのです。生涯学習社会が進むためには、社会が学ぶことの価値を認めるという条件が必要です。経済の価値だけで人間の価値を測る社会のままでは、生涯学習社会は決して来ないでしょう。経済的な豊かさを否定するつもりはありません。でも「学び」とは、その人の文化的な力をあげることで、自分を新たに変えること、それこそが人間にとって第一に重要なことだと思うようにみんなが思ったら、社会のしくみは変わるでしょうし、その分、確実に心豊かな社会になるのではないのでしょうか。江戸時代の目から教育を考えてみると、私の結論はそこにたどりつきました。

(拍手)

(辻本雅史先生講演終了)

【質疑応答】

山崎洋子(司会 教員): 辻本先生、ありがとうございます。大変興味深い話を学生に分かりやすく説明していただきました。またこれらか教職に就く学生への励みになる力強いお言葉をいただきました。ありがとうございます。先ほど、関西空港に到着されたばかりで、お疲れのことと存じますが、もう少しお時間を頂き、参加されているみなさんからの質問にお答えいただきたいと思います。辻本先生のご著書を読んだ方もいらっしゃると思います。どうぞ積極的に質問してください。

丸井千尋(学部4年): 今日本当にありがとうございました。先生のお話を聞くことを大変楽しみにしておりました。ひとつ質問です。私は受験の話と生涯学習の話がなかなか結びつきません。高学歴な人は学校教育の内容を身体化していると思いますが、それを前提とすれば学校はどうなっていくべきなのでしょう。

辻本雅史: 今日教科のカリキュラム、いわば知の話をしました。学校教育では、教科で教える中身だけが大事なのではありません。空間と世界を同じくしていることに一種の「身体性」があります。「隠れたカリキュラム」という言葉があるのをご存じでしょう。学校の「校風」のように、無意識のうちに身体化されているものもあります。他にも「チャイムがなれば教室にはいる」という学校文化は、学校で学んだ人、とくに高学歴の人なら身に付けていますね。こうした隠れたカリキュラムとして、身体化の文化は続いていると思います。でも、教える中身(教科カリキュラム)には、学びの身体性がなくなっている、と考えられます。かけ算の九九などは、数少ない身体化された学びでしょう。近代の学びに「身体性」が欠けている、と気づくだけでも、私たちの学校の学びは少しは変わってくるはずですよ。

確かに入試と生涯学習とはなかなか結びつかないでしょう。私は、生涯学習を真ん中において、学校教育システムを組みかえることを申し上げたいのです。ではどうすればそれができるのか、という問いに答えるのは、歴史研究者の仕事ではないと思っています。学校教育の必要性は否定しませんが、学校教育が一番良い教育のシステムである、とは考えないで、「学ぶこと」で少しでもよりよき「人としての力」を高めることがもっとも大事な文化の価値だと考えるようになる、経済の価値だけで人の価値を計るのではない、という価値観の転換をはかり、そこから学校も考えなおすべきではないかと申し上げたいのです。そうなれば、入試のあり方や意味づけもぜんぜん違うものになるのではないのでしょうか。

岩尾麻耶(修士1年): 辻本先生は言葉が人格を形作るとされ、「ことば一こころ」の順番にされていました。私は、何かの言葉が出てくる以前にもやもやしたものが自分の中にあって、そこで言葉と出会い、真の理解が得られると思いますので「こころ一からだ」の順だと思うのですが。

辻本雅史: その状態は私の説明と合っています。心に生まれた「もやもやしたもの」、それを言葉で的確に言い表せたら、心が鮮明になる、つまり心が「形」になるでしょう。ですから私は「言葉はこころの容器・容れものである」と申し上げたのです。(質問者、納得)自分の言葉で自分を表現できる人、他人とつながることができる人は、簡単にはキレません。「キレやすい」子どもは、言葉の力が弱いので

はないでしょうか（実証はされていないかもしれませんが）。

大津尚志（教員）：「自己学習の力」がおちていることをどう考えるか。

辻本雅史：益軒先生の言葉を素材にしていえば「立志」、なぜ学ぶのか、将来の自分をどのようにイメージするのか、そのために今、何をしないといけないか、そう思うことで学ぶことの意味づけも変わるように思います。「自分を今よりより良いものに変えていきたい」ということではないでしょうか。

矢野裕俊（教員）：かつてあった小学生向けの「学習」「科学」などの雑誌の廃刊により、そのような経験が好奇心を高めるとか、自学のためのしかけが弱くなっている。時間の余裕があって、自分一人で学ぶ機会がなくなってきたことをお話を聞きながら考えました。

辻本雅史：子ども同士で遊ぶことが少なくなっているようですね。遊ぶことを通して学ぶことがある。儒学でも仏教でも、大自然の存在を究極のところ強く意識しています。自分もこの大自然の一部で、大自然とつながってこそ、生きているのだという感覚が弱くなっていると思います。子どもの遊びは、どこかでこの大自然とつながっているはず。大自然の際限ない豊かな世界を、いかにして感覚的によみがえらせるか、それが人間形成の根本であると思います。大自然で一番身近なもの、それは自分の身体。「学びの身体性」と申しましたが、自然を自分の身体のなかにみいだすというような、リアリティをもって「生きているとはどういうことか」という哲学的な課題までふくめ

て、身体を自然の一部と捉える感覚があると、いじめの問題など、教育のさまざまな問題も変わってくるのではないのでしょうか。子ども時代に遊びながら、意識しなくても実感している大自然と関わる自分の存在の感覚、そういうものがやせ細っている。大人のほうがしかけをつくるにせよ、それも弱くなっているように思います。そのためのしかけをつくるのはたぶん教育者、教育学者の仕事ではないのでしょうか。

柴田清継（教員）：私は現代中国語の学習からはじめて、古代中国語、いわゆる文語で書かれた文献を読んでいる。江戸時代までの日本では中国語（原音）でなく訓読を通じて文言の読解に習熟していき、高いレベルに到達している。実は、明治時代のはじめに清国から文化人がやってきたとき、日本の漢詩文に通じていた人が詩文の交流をはじめた。そういった人の漢詩文の力は清国の文人から高く評価された。原音から入ったわけでもないのにどうして高みに達することができたのか。かねてからの疑問であったが、今日の辻本先生の面白い説明、「スキャナー読み」というご説明に納得しました。重要なヒントをいただき有難うございました。

山崎洋子（司会 教員）：本日は辻本先生をはじめ、みなさま方の貴重なお時間をいただき、大変実りの多いセミナーとなりました。「近代教育」の問題点や課題について、再度、考える機会を与えていただきまして、本当にありがとうございました。最後に、もう一度、辻本先生に心より御礼申し上げます。

（拍手）

「江戸」から教育を考える

2012/12/07

武庫川女子大学大学院・教育学専攻



辻本 雅史

(渡辺崋山「一掃百態」部分)

はじめに: 歴史の視点から教育を考える

- ◇「江戸」から考える:
タイム・マシンからの目
- ◇「教え込み型」と「しみ込み型」
(東洋『日本人のしつけと教育』1994東大出版会)
- ◇「教え」より「学び」の文化伝統

寺子屋 (手習塾) の学習

- (1)手習い=文字学習:「文字文化」と「文字社会」
* 文字普及と商業出版⇒知の変革(メディア革命)
◇寺子屋は江戸時代の小学校か?
- (2)臨書:「手本」の模倣と習熟、手書き手本・往来物
- (3)個別指導と自己学習(一斉授業なし)
身体活動、登下校非定時(生活時間優位)、机の並べ方
◇師匠(教師)の役割

「文字社会」: 京都の町触文書



寺子屋の図(崋山『一掃百態』)



寺子屋の錦絵(一寸子花里)



学問・儒学の学習 藩校・学問塾

経書(四書五経等)を「読む」学問

【素読】8歳前後「テキストの身体化」

○四書52800字、ex.100字/日⇒1年半 漢文読解能力獲得

* 漢文訓読: 日本語文法≠非日常古の典雅語

⇒暗誦に適したリズムと言回し

【講義】講授・講釈、経書の字義や文脈の解釈

【会講】会読・輪講、経書講釈、史・子・集の会読

【独看】一人で読む=音読、看書(黙読?)

<スキャナーの読み?>

素読稽古(個別指導と自己学習)



講釈、会読



「知的言語」としての漢文習得

- ・知的言語(学問的文章は漢文表記)
- ・経書=聖人の思想言語
- ・国際的言語(漢字文化圏一筆談)
- ・「漢文で考えた」(思考言語としての漢文)
- ・素読=聖人の思想言語の身体化

学びの身体性

素読の身体性—音読?(cf.黙読)身体のリズムと響き

・「そらに覚えざる事は、用にたたず」(『和俗童子訓』)

⇒テキストの身体化

・漢文の言語形式の身体への刻印→思考の形式(型)

・「漢文で考える」学術言語・思考言語としての漢文 (cf.ラテン語)

「初学の知る所、俗学の記す所は、其の皮膚に止まるのみ而已。君子の知る所は皮自りして肉に到り、肉自りして骨に到り、骨自りして髓に到る。其の間に幾重の界限を隔てることを知らず。(中略)苟くも学んで自得すること能はざる者は、即り是れ口耳の学、訓詁記誦の習のみ而已」(原漢文)『慎思録』巻4

・「素読」は漢文という「知的言語」習得学習

近代学校=近代学知(学問)が基礎

■モデルとしてのscience

(自然科学:客観的事実と理論で実証)

曖昧でない一義的で文字化された概念と論理で構築

⇒近代学校教育(教科)は近代の学知(学問)が基礎づけ

- 教科のカリキュラム=子どもの発達段階に応じてプログラム化して編成

●専門教師が「教え」/子どもは「教えられる」関係
⇒「教え込み型」

貝原益軒(1630-1714)



「予(あらかじめ)する」教育

- 「予するとはかねてよりといふ意。小児のいまだ悪にうつらざる先に、かねてはやくをしゆるを云。早く教えずして、悪しき事に染みならひて後は、教えても善に移らず。いましめても悪をやめがたし。古人は、小児のはじめてよく食しよく言う時よりはやく教えしと也」『童子訓』
- 「十歳より内にて早く教え戒しむべし。性、悪くともよく教え習はさば必ずよくなるべし。いかに美質の人なりとも悪くもてなざば、必ず悪しきにうつるべし(略)うぐひすの雛をかふに、はじめて鳴く時より、別によくさゝづるうぐひすを其の傍らにおきて、其の音を聞き習わしむれば、必ずよくさえずりて、後までかはらず」同
- 「ことば—こころ—からだ」の関係⇒ことばの教育

心と言葉：言葉は心の容れ物

- 言葉と心の深い関係
 - ことばの修得過程=こころの形成過程
 - 思考は言語活動→「ことば心に形を与える」
 - 「ことばは心の容れ物」
 - ※豊かな「ことば」文化伝統(ことば遊び)
 - ⇒自己表現・共感・他者理解 (人と人とがつながる)
 - ※心の教育より言葉の教育
 - 名文習熟・俳句の勧め

模倣と習熟=習へば性となる

- 「およそ人は、よき事もあしき事も、いざしらざる幼なき時より、習ひ馴れぬれば、まづ入りし事、内に主として、すでに其性となりては、後に又よき事、あしき事を見聞きしても移り難ければ、いとけなき時より、早くよき人に近づけよき道を教ゆべき事にこそあれ」『童子訓』
- 「およそ小児は智なし、心も言葉も万のふるまひも、皆其かしづき従ふ者を、見習ひ聞き習ひて、かれに似するものなり」同

身体から心へ⇒「しつけ」の人間形成

- ◇礼にもとづく教育文化
 - 「礼は天地の常にして、人の則也。即ち人の作法をいへり。礼なければ人間の作法にあらず。禽獸に同じ。故に幼より礼を慎みて守るべし。人のわざ、事ごとに皆礼あり。万の事、礼あればすちめよくして行はれやすく、心も亦定まりてやすし」(『和俗童子訓』)
 - 礼=身体の規律化
 - ⇒心の安定(しつけの人間形成) ex.茶道
- ◇独創・個性「信仰」—近代のイデオロギー
 - 模倣は独創や個性の母体
 - (山田獎治『日本文化の模倣と創造』角川書店02)

茶道



教師のあり方

幼児の模倣する力(学ぶ力):子どもは周り・環境を真似て自己形成

「朱に交われば赤し、墨に近づけば黒し」『童子訓』

「師は小児の見習ふ所の手本なればなり」(同)(師匠=先生のあり方大事さ)

*「教え」より「環境」(人の環境: 父母・保育者・家族、友、教師)

*「教えない教育」: 前提に教師への信頼感(教師は学ぶ側が選ぶ)

■何を「教える」か: 「いましめる」、子どもの自己活動が前提

◇「教(ヲシエ)」: おしえは、おさえ也。人の悪をおさへて、よき事をしらしむる也」

◇「学」: 「ま」はまこと也、「なぶ」はならふ也。まことをならふ也。正真のごとくせんとならふ也。小児の手をならふがごとし。書き似せて正真の手本のごとくにかかとならふ也」(『日本釈名』)

■【真似する-真似される】関係=信頼が不可欠: 信頼⇒全てを自然に真似る

「立志」・「自得」・「思索」

* 自己活動、模倣と習熟⇒

「聖人、人に道を与ふるも志を与ふること能はず」
学ぶ側の内発的動機

* 「学びたい」という子どもの《意欲》が大前提

・「学力低下」は「立志」(学習意欲)の低下?

・何故学ぶのか? 教育の言葉で語れるか

教科書の問題(教科書観)

* 「教科書で教える」か

「教科書を教える」か

* 近世の視点: 「手本」と経書

(身体化の対象=モデル、真理の具体化)

自己学習の教育文化

(1)通信教育の歴史: 明治10年代末以来の「大学講義録」「中学講義録」、通信教育

(2)公文式学習: 自学自習=教えない、学習意欲
計算力=身体的理解

(3)「宿題」という習慣

自習の習慣化: <ランドセルと勉強部屋と学習机>

(4)受験勉強: 自習用参考書、暗記・反復の学力

→大学入試は自己学習力の測定

※「滲み込み」型学習(cf. 教え込み型)

「第二次メディア革命」進行中(400年ぶり)

(1)多様なメディア:

テレビ、電子ゲーム、ケータイ、インターネット

(2)文字より声と映像

身体性欠落(バーチャル世界のリアリティ)

刺戟する感覚器官の相違

⇒「心」(内面世界)や人間の関係性の変化

⇒社会の変化